

# 黒豹注意報 4

～純情OL タンポポの成長～

## もくじ

黒豹注意報4 5

番外編  
清らかな花に惹かれる獣の本能 273

黑豹注意報 4

ここは、日本最大手の文具メーカーの社屋からほど近い場所にあるカフェ。その店内の一角で、中村留美と竹若和馬は向かい合って座っていた。同じ大学出身で、会社の同期でもある二人の間には、性別を超えた友情が成立している。昔はよく行動を共にしていたが、最近こういう機会は滅多になくなっていった。なぜならば……

「タンポポちゃんは一緒にじゃないの？」

心底不思議に思い、留美は問いかける。

「タンポポちゃん」とは、留美と同じ総務部に所属する後輩社員、小向日葵ユウカのこと。苗字が小さいヒマワリだから、黄色い花繋がりで「タンポポちゃん」というあだ名で呼んでいる。

短大卒で入社した彼女は、課の中で一番若く、また小柄で幼い顔立ちをしているため、妹のような存在だ。その可愛い妹は、目の前の男、竹若の恋人でもある。

付き合い始めてから、竹若はユウカにべったりで、こんな風に別行動をとるのは珍しい。もともと、三人でお茶をしようという約束で今日も集まっているのだから、そのうち彼女も合流すること

になるのだけれど。会社からこのカフェまでも、一緒に来るものだと思っていた。

「ユウカは片付けておきたい仕事があるというので、私だけ先に来たのです。本当は待っていて一緒に来たかったのですが、傍にいと集中できないと言われてしまいましたね。仕方なく」

竹若は憂いを帯びた声で言い、運ばれてきたコーヒーを一口飲む。

社長秘書兼SPを務める彼は、黒髪に切れ長の目が特徴の和風美青年で、たとえるならば黒豹のような人物。そんな彼が今みたいにアンニュイな表情をしていると、妙に色っぽい。

学生時代からの付き合いである留美は見慣れていてどうってことないが、近くの席に座っている女の子たちは彼を見てキャアキャアとささやき合っている。

「……つたく、タンポポちゃんの残りの仕事が終わればすぐ会えるのに、なんて顔するのよ。ていうか、どんだけタンポポちゃんが好きなのよ」

留美ははあっとため息を吐いてから、ミルクティーを一口啜る。

「タンポポちゃんと付き合いだしてからの竹若君は、まるで別人よね。そんなふうに他人に執着するあなたを、見たことなかったわ」

留美の言葉に、竹若は苦笑いした。

「そうかもしれないね。ユウカに出逢うまで、私はそういった感情を抱いたことがなかったものですから」

「そうそう、聞いたわよ。つい最近も、白猫のコスプレをしたタンポポちゃんを、意味不明な理由

で連れ去ったんですって？」

いたずら好きな後輩が、ユウカに猫耳カチューシャと猫手グローブを装着させたいきさつを、留美は後になって聞いたのだ。

その話を聞いた時のことを思い出して半笑いの留美に、竹若はシレッと返す。

「人聞きの悪いことを言わないでください。野良猫を社内で見つけたら、速やかに外へ連れ出すべきでしょう。私は最善の策をとったままでですよ」

「なに言ってるの！ 自分の家に連れ帰ったただけでしょうが」

ユウカと付き合っているからの彼は、思考がぶっ飛んでいる。今も、あまりの言い草に、めまいがしてきた。留美は気を落ち着かせようと、ミルクティーをもう一口含む。

竹若は極上の笑顔でさらに言う。

「あんなに愛らしいユウカを見て、我慢できるはずありませんよ」

「いちいちドヤ顔するのやめてくれる？ そういえば、ただ連れ出すだけじゃなくて、お姫様抱っこした上に、公衆の面前で鼻にキスマでしたんですってね」

恥ずかしがり屋のユウカを不憫に思い、社内ですら平然と暴走行為を繰り返す竹若を睨んだ。しかし、その程度で怯む男ではない。

「私たちの関係を見せ付けて、悪い虫が寄り付かないようにするためですよ」

さも当然という態度で言っている友人に、留美はやれやれと軽く首を振る。

「まあ、タンポポちゃんってそういうことには鈍いから。自分がけっこうモテモテだって気が付いてないものねえ」

留美の言葉に、竹若は深くうなづく。

「無邪気なのは彼女の長所ですが、周囲の男性に警戒心を持っていただかないと」

「私としては、あんたはもう少し羞恥心を持つべきだと思うけど。タンポポちゃんは竹若君といると、いつも顔を真っ赤にしているじゃない。あんたが余計なことをやらかすから、あの子が羞恥地獄に陥ってるんですよ！」

留美のことなどおかまいなしにコーヒートの香りを楽しんでいた竹若が、動きを止めた。

「余計なことではありませんよ。中村君が言う通り、ユウカは異性から向けられる好意に気が付かない質ですからね。彼女のためにも、私が率先して害虫駆除を行わなくては」

「それは大事なことだけど、ちよつとやり過ぎだと言っての。はあ、それにしても、あれだけ公開羞恥プレイをされているのに、竹若君と別れようとしないなんで。タンポポちゃんって、ある意味タフよねえ」

ポットから紅茶を注ぎながらポツリと零すと、「愛し合っているということですよ」と、竹若が即座に返ってくる。

留美はだんだん面倒くさくなってきて、やや乱暴にポットをテーブルに置いた。

「……なんかムカつくわ。腹いせに、タンポポちゃんと二人で温泉旅行にでも行って気晴らししよ

うかしら」

名案を思い付き、留美は表情をパツと明るくした。反対に、竹若の表情は曇る。

「女性二人で温泉旅行となれば、当然一緒に入浴するつもりですよね。私ですらユウカと入浴したことはないのですから、やめてください」

「えー、どうしようかなあ」

ニヤニヤと笑う留美に、竹若も笑顔で応戦する。ただ、彼の目は、まったく笑っていない。

「考え直してくださいと、毎朝、モーニングコールしますよ。ユウカいわく、うっとりするほどいい声らしいですから、楽しみにしててくださいね」

途端に、留美は青ざめる。

「やめてよ！ 朝から気分が悪くなるわ！ 分かったから、竹若君も必要以上に社内でタンポポちゃんをかまうのはやめなさい」

「つまり、必要であれば人前でもユウカをかまってもいいと」

「……あんたはまた、自分の都合いいように解釈して。と・に・か・く、誰かがいるところでイチャコラするのはやめなさいっての。人目もはばからずイチャつくなんて、あんたの元カノが見たら卒倒するわよ」

竹若は静かに、だがきつぱりと言い返す。

「会うつもりはまったくありませんので、その心配はありませんね。それに、ユウカ以外の女性に

どう思われても関係ありません。私はこの先ずっと、ユウカ一筋ですから」

それを聞いて、留美は短く息を吐いた。

「竹若君って相変わらずモテるけど、浮気しそうにないところが救いよねえ。異常なほどの独占欲と執着心は、ちよっぴり鈍いタンポポちゃんにはちよっぴりいいのかしら」

「できることなら、今以上にユウカのすべてを独占したいものです」

竹若が言うとお気で実行しそうに思えて、留美はますます青ざめる。

「やめなさい。それ、監禁するって言ってるのと同じよ？」

「ユウカのこととなると独占欲や嫉妬心がとめどなく湧いてくるんですよ。彼女は、私にとって特別なのです」

コーヒーを一口飲んでカップを置いた竹若は、真剣な眼差しで正面の友人を見遣った。

彼の気持ちは分からないこともないが、大事な後輩のためにも留美としてはこれ以上の暴走を容認する訳にはいかない。

「監禁は絶対にダメ。でもさあ、大学時代に付き合っていた彼女たちに対しても、それなりに独占欲ってあったんじゃないの？」

問われた竹若は、僅かに目を伏せた。

「付き合っていた女性たちのことは、確かに他の女友達とは違う存在だと、当時の私も思っていました。ですが、私がユウカに抱いている感情とはまったく違います。そういう意味で、彼女たちは

私にとって本当の恋人ではなかったのかもしれない」

「もともと、竹若君は押し切られる形で付き合い始めたんだものね。それも仕方ないかあ。特に、最後に付き合った津島さんは強烈だったわ」

津島、という名前を聞いた途端、竹若は重いため息を吐いた。

「大学時代もそうですが、先日でも彼女のせいで苦労しましたよ」

「タンポポちゃんをわざわざ訪ねて来て、竹若君と別れるよう迫ったんでしょ？ 何日か前から、あの子を付け回していたらしいわね」

「そうなんですよ。私が仕事に追われてユウカと会う時間がなかったために、対処が遅れてしまいました。こんなことなら、仕事などすぐさま放り出すべきでした」

悔しさを露わにして、膝の上で拳を握り締める竹若。すかさず留美は突っ込む。

「……それ、社会人として失格だからね」

留美が諷めると、竹若は苦笑いした。

「冗談です。まあ、狡猾い津島さんのせいで引つ掻き回されましたが、おかげでユウカは恋愛のなるたかを少し掴んだようですよ。そうそう、中村君もユウカが気付く手助けをしてくれたと聞きました。私からもお礼を言わせてください」

姿勢を正した竹若が、頭を下げる。かしまった彼の様子を見て、留美は軽く肩を竦めた。

「タンポポちゃんたら、お似合いの意味を勘違いしていたんだもの。誰からも否定されなくらい、

見た目や能力の釣り合いが取れていることがお似合いだって考えていたみたいだからね。お節介とは思ったんだけど、放っておけなくて。……で、そこにきて容姿端麗な津島さんの登場とあって、タンポポちゃんは心穏やかじゃなかったみたいだったし」

「まさか復縁を迫られるとは、思いもしませんでした。無理やり撮った私とのツーショット画像をユウカに見せながら『自分たちは付き合い合っている』という嘘までついて」

心を落ち着かせるように、竹若はゆっくりとコーヒーを口に含む。

留美は自分にとつても大学時代の同級生である津島の姿を思い浮かべながら返した。

「根性が曲がった彼女なら、そのくらいはやりそうね。それでタンポポちゃんに、『子供っぽいあなたは竹若君に相応しくない。私のような美人じゃなきゃ釣り合わないわ』とか言ったりして」

「さすが中村君、鋭いですね。まさにその通りでした」

疲れた声で零す竹若に、留美は苦笑する。

「あらら。津島さんは学生時代とまったく変わってないのねえ。お似合いって、そういうことじゃないと思うんだけど。そういう人と付き合い合ったら、恋愛するのが嫌になりそうだわ。ああ、だから竹若君は、津島さんと別れてから誰とも付き合い合わなかったの？」

竹若は口の端を少しだけ上げて、弱々しく笑う。

「私自身が恋愛を望んでいなかったことも要因でしょうが、その頃には自分の外見ばかりが評価されることに、精神的に疲れていたのですよ」

「当時は、竹若君を見せびらかすことで優越感に浸りたいって女性が群がっていたものね。ひどいわ、竹若君はアクセサリーじゃないのに」

竹若の虚しさが分かるような気がして怒ると、彼の表情が優しくなった。

「今の中村君のセリフと同じことを、ユウカも感じ取ってくれましてね。私が持つステータスだけが好きなのではないか、と言って津島さんを問いつめたそうですよ」

「タンポポちゃん、随分と鋭いじゃない」

恋愛初心者のユウカの成長を知り、留美は目を瞠った。その様子を見ながら、竹若は穏やかに話しかけてくる。

「さらには『彼を引き立て役に使うなんて許さない！ 優しい彼を、私の大切な恋人を、これ以上傷付けるなんて絶対に許さない！』と、涙を流しながら叫んでくれましてね」

留美は椅子の背にもたれかかり、感慨深く思いながら息を吐いた。

「はあ、驚きだわ。タンポポちゃんが、あの津島さんにそんなことを言ったとは」

「それだけ私のことを愛してくださっているのですよ」

満面の笑みを浮かべる竹若を、留美はチラリと見遣る。

「いちいち突っ込むのも馬鹿らしくなってきたわ。あー、はいはい。好きなだけ惚気なさいよ」

留美がそう言うと、竹若の形のいい目がゆるりと弧を描いた。

「ユウカは、今まで誰も守ってくれなかった竹若和馬という人間の心を守ってくれたのです。その

ような女性はユウカが初めてでした」

「タンポポちゃんは不思議な子だわ。まだ幼くて不安定なところがあるかと思えば、人間にとって本当に大事なものを無意識に理解しているんだもの」

それを聞いた竹若の表情は、さらに甘く蕩けたものに変わっていく。

「だからこそ私は心底惚れ込み、愛してやまないのです。津島さんの一件で、お似合いとは、気持ちが重なり合うことではないかと気付いた時のユウカは、とても晴れやかな表情をしていました。

それがまた大変愛らしく、私は惚れ直しました。世界中の誰よりもなによりも、ユウカの存在は魅力的です。私はこの先も、数え切れないほど、彼女に惚れ直すことになるのでしょうか」

「……好きなだけ惚気てもいいとは言ったけど、やっぱりムカつくわ。もうお腹いっぱい、これ以上二人のイチヤイチャを見るのはごめんよ。というわけで私、今日はこれで帰るから。この後は二人きりで、楽しくお茶でもしなさいよ」

バッグを手に、留美は勢いよく席を立つ。

「なにをおっしゃいますか。私とユウカの愛に溢れまくる日常を、まだまだたっぷりお聞かせしますよ」

ニッコリと笑う竹若に、留美はグツと眉を寄せた。

「やめて、絶対に胸焼けする！ 精神的苦痛を味わわせた慰謝料として、支払いはよろしくね！」

声高に叫んで去ろうとしたら、竹若はカップに残っていたコーヒーストームを飲み干してついて来る。



「では、私も店を出るとしますか。ユウカの話をしていたら、今すぐにユウカを抱き締めたくなり  
ました。やっぱり会社に彼女を迎えに行きます」

……こうして、竹若によるユウカ溺愛ストーリーは、新たな幕を開けるのだった。

## 第一章 あなたの笑顔のためならば

### 1 スイート・デンジャラス・ホワイトデー

三月のおわりに差し掛かると、木々は競うように桜の花を咲かせ、お花見日和が続いていた。こ  
こ数日の雨で、少し花びらが落ちてしまったけれど、真新しい葉を付けた桜の木もなかなかいいも  
のだ。

花の儂い美しさとは違い、生命力に溢れる力強い感じも私は好き。色鮮やかな緑を見ると、  
自然とやる気が湧いてくる。

私、小向日葵ユウカは総務部の窓から見える桜の木を眺めながら、そんなことを考えていた。  
この会社に就職して、もうすぐ一年。私はこの春、めでたく社会人二年目を迎える。  
昨年に引き続き、広報課の社員として社内報や商品カタログを作るのが私の仕事だ。  
年度が変わっても業務内容に大きな変更はなく、さしあたっての問題もない。

しかし、新入社員が入ってくれば、状況は少し違ってくるだろう。来週行われる入社式以降は、  
社内が確実に慌ただしくなる。

自分の時もそうだったけれど、新人が職場や業務に慣れるまでは、本人はもちろんのこと、周りもそれなりに大変になるはず。

これまでは教えてもらおう立場だった私にも、後輩という存在ができるのだ。もう、新米OLとは言わせないぞ。先輩としての威厳を保つためにも、これまで以上に頑張って仕事をしなくては。

……と、その前にエネルギー補給だ。

仕事が一と段落し、両手を大きく上げて伸びをする。時計を見ると午後三時を回っていた。

「よし、休憩だ！」

仕事の能率を上げるには、気分転換となる休息も重要。そして、脳のエネルギーとなる糖分も必要だ。

あ、あのね、これはおいしいん坊だからじゃないよ。人間の脳はね、ブドウ糖をエネルギーにして動いているんだって。だから、甘いものは必要なの。ダイエットを忘れた訳じゃないんだよ！

と、誰に聞かせるでもない言い訳を心の中で繰り返しつつ、私はバッグの中から小さな紙包みを取り出す。

午前中、部長に頼まれて外出した帰りに、通り沿いにあった和菓子屋さんで桜餅を買ったのだ。

濃厚なチョコも、クリームたっぷりふりのケーキも、サクサクのクッキーも好きだけど、和菓子も大好き。

それに、桜餅はこの時期にしかお目にかかれないしね。今食べなかつたら、いつ食べるのよ！

日本人なら四季を大事にしないと！

ウエットティッシュで手を拭い、いそいそと包みを開く。すると、桜の葉の香りがほのかに漂ってきた。

「はあ。この香り、落ち着くなあ」

しばらく独特の香りを堪能した後、大きく口を開けてパクリ。

桜の葉を剥がしてしまう人も多みたいだけど、私はそのまま食べる。あんこの甘みと、葉の塩気が相まって好きなのだ。

「この生地、美味しいなあ。あんこの甘さもちょうどいいし」

ご機嫌でムグムグと食べ進めているところに、優しく声を掛けられた。

「タンポポちゃん、お疲れ様」

声が出た方に顔を向けると、留美先輩がいた。

「あら、桜餅を食べてるの？」

「はい。お店に並んでいるのを見たら、食べたくなっちゃって。よかつたらいかがですか？先輩の分も買ってありますよ」

ふたたび手を拭いてバッグから紙包みを取り出した私の頭を、先輩がほっそりした指で優しく撫でた。

「ふふっ。タンポポちゃんは、余すところなく桜を満喫しているわね。花は写真に収めて、葉は胃

に収めて」

社屋西側に並ぶ桜が見頃だった時期に、留美先輩に絶好のポイントを教えてもらい、そこで趣味である写真を撮ったのだ。

そして今は、文字通り葉っぱをお腹に収めている。

「そうですね。目でも舌でも楽しめる桜って、本当にいいものですよねえ」  
しみじみと答えると、留美先輩が小さく笑った。

「タンポポちゃんらしい感想ね」

「それは私が食いしん坊ってことですか？」

「否定できる？」

ニツコリ笑う留美先輩に、「……いえ、できませんねえ」と、私は苦笑する。

「別にいいじゃない、食いしん坊でも。タンポポちゃんが美味しそうに食べている姿、すごく好きだわ。見ている私まで幸せな気分になるもの」

「そうですか？」

食いしん坊なところを褒められるのなんて、私くらいではないだろうか。

そう思っただけにさらに苦笑いを深めると、また頭を撫でられる。

「ええ、そうよ。じゃ、私からもタンポポちゃんにプレゼントをあげるわ」

「なんですか？」

「これ、好きでしょ。この前も大喜びして食べていたわよね」

そう言っただけ先輩が差し出してきたのは、有名パティスリーの名前が入った包装紙をまとった小箱。

「きゃー……！！」

その箱を見た途端、私は思わず声を上げる。けれどそれは、歓喜によるものではなく、羞恥の悲鳴だった。

「え？ ちよつと、タンポポちゃん？」

大好物を前に悲鳴を上げて顔を真っ赤にしている私を見た先輩は、意味が分からない、といった様子で首を捻る。

「どうしたって言うのよ？ このお店のマカロン、好きだったじゃない。嫌いになったの？ っていうか、なにを恥ずかしがってるのよ？」

「あ、あの、その、好きですよ。ただ、今は、なんて言いますか……」

火照った顔を両手で押さえ、デスクに伏せてモゴモゴと口ごもる私に、留美先輩は困惑気味。

先輩が買ってきてくれたマカロンは、真正銘、大好物だ。

正確には、大好物だった——約二週間ほど前までは。

いや、まあ、マカロン自体は今でも好きではある。ただ、それにまつわる思い出が蘇ると平常心でいられなくなるのだ。

それというのも……

今月の十四日、ホワイトデーの日。

朝一番で届いた和馬さんからのメールには、『バレンタインのお返しをユウカに渡したいです。仕事の後、都合はいかがですか?』とあった。

人生初の手作り本命チョコを渡して、もう一ヶ月が経つのかと、時の速さをしみじみ感じる。だが、バレンタインの時に、私は和馬さんからもチョコをもらった。だから、私が彼になにかをもらうのはおかしいと思う。

そのことをメールに書いて返信すると、

『私が用意したチョコは既製品です。ユウカが私のために手作りしてくれたチョコほどの価値はありませんよ。ですから、是非ともお礼がしたいのです』  
と返ってきた。

いやいやいや、そんなはずはあるまい。彼がプレゼントしてくれたチョコは、味に比例して値段も高い物だったのだ。

改めて「お返しは必要ないですよ」と送ると、すぐさま返信が。

『恋人である私に遠慮などしないでください。ユウカはもつと私に甘えて、もつと私にワガママを言うべきですよ。それに、ユウカが受け取ってくれなければ、用意した品が無駄になります。私のためにも、どうか受け取ってください』

それを見て、ちよつと笑ってしまった。

「和馬さんは私を甘やかすぎだよ」

私は少し考え、「仕事の後に会いましょう」とメールを送る。そして、背伸びを一つした後にベッドから抜け出した。

「これでも十分甘えてるんだけどなあ」

子供っぽくても、恋愛ことに不慣れでも、和馬さんは私に対して不満を言ったことは一度もない。そういつた素振りすら見せない。

七歳も年上の和馬さんには今みたいなお付き合いは物足りないだろうと思うのに、それでも彼は目一杯私のことを愛してくれている。まっすぐに気持ちを向けてくれる。

もう十分なのにこれ以上甘やかされると、和馬さん抜きでは生きていけなくなってしまうそうだ。そんなことを考えていると、また携帯電話がメールの着信を告げた。

「ん？ 和馬さんだ。やっぱり都合が悪くなったから、今夜は会えないとか？」

社長の第一秘書として忙しい彼だから、数分で予定が変更になる場合も多い。そういつたことを想定しながらメールを開いたら、

『ユウカが私抜きで生きていけないのであれば、それこそ望むところですよ』  
と書かれている。

その文面を見た途端、私は顔が軽く引き攣った。

「うわあ！　なんで和馬さんは、私が考えていることが分かるの!？」  
我が彼氏様は、今日も素晴らしく勘が冴えているのであった。

こうして、その日も仕事を終え、いつものように和馬さんが総務部まで迎えに来てくれるのを待つ。帰りに一緒に夕飯の買い物をして、彼のマンションへやってきた。

夕飯のメニューは鶏肉と長ネギの雑炊に、中華風春雨サラダ。それに大根とツナの煮物だ。ホワイトデーのプレゼントを用意してくれた和馬さんに、せめてものお礼として彼の好きなものを作ることにした。

どれも簡単に作れるからこれをお礼にしてしまうのは申し訳ないと思うんだけど、和馬さんが食べたいというのだから、まあいいか。

ほどなく夕飯ができあがり、二人で食卓につく。

和馬さんほどの料理も美味しいと言ってくれた。食後、リビングのソファに腰を下ろしたところ、件のマカロンが登場したのだ。

「はい、どうぞ。バレンタインのお返しですよ」

和馬さんが小ぶりの箱を差し出してきた。

品のよいサーモンピンクの包装紙を見ただけで、私には中身が分かる。思わず顔がにやけてしまった。

それはここ最近、私のテンションを急上昇させてくれるアイテム。スイートパレスのマカロンだ。「うわあ、ありがとうございます！」

マグカップをローテーブルに置き、満面の笑みで小箱を受け取る。

ここ数年ブームになっているマカロンは、割とどこでも手に入るようになった。

ところが、このスイートパレスのマカロンは、他のお店のマカロンとはまるで別格なのだ。さすがは有名な専門店である。

マカロン生地サクツとした歯触りといい、間に挟まれているクリームの種類の豊富さといい、文句のつけどころがない。そして彩りや味も、もちろん拔群。

以前、留美先輩からお裾分けしてもらって以来、私はすっかりこの店のマカロンに夢中なのだ。だけど、そのことを和馬さんには話していない。下手に教えると、仕事で忙しいのに、彼は店まで買いに走るだろうから。

仕事を抜けて菓子店に向かう和馬さんの話は、これまでに社長から何度も聞いているのだ。

……色々な意味で申し訳ない。

——内緒にしていたのになあ。

いくら勘のいい和馬さんでも、この店と品名をピッタリと当てるのは難しいはずだ。

小箱を撫でながら首を傾げていると、和馬さんがクスリと笑う。

「中村君に聞いたんですよ。このところ、ユウカが一番気に入っている店とお菓子の種類を」  
ああ、そうか。仲のいい留美先輩に聞いたのか。それなら納得だ。ちよつと盗聴器の存在を疑ったよ。

恋人とはいえ、盗聴器を仕掛けられたら、思いつきりドン引きである。  
「どうか犯罪だ。」

——よかった。和馬さんが犯罪者じゃなくて。

微妙な笑みを浮かべている私を、和馬さんが不思議そうに見ている。

「どうしました？」

「い、いえ、なんでもありません。さっそく開けてみちゃおうかなあ。わあい、楽しみ〜」

内心を悟られないうちに、私はいそいそとホワイトデー仕様の包装紙を解く。しっかりと造りの箱を開けると、やはりマカロンが現れた。

以前食べたことのあるストロベリー味のマカロンよりも、少しピンク色が濃い。添えられているカードには、この時期限定のラズベリー味と書いてあった。

そのマカロンを眺めながら、私はあることに思い至る。

スイートパレスに限らず、甘い菓子類を扱っている店は、総じて女性客が多い。バレンタインの時もそうだったけれど、和馬さんは女性客の多い店に行くのが恥ずかしくないのだろうか。

「あの……、ごめんなさい」

私が謝ると、和馬さんは心底不思議そうな顔をして首を捻る。

「なぜ謝るのですか？ そのマカロンは気に入らないということでしょうか？」

ブンブンと首を横に振り、彼の言葉を否定した。

「いえ、違います！」

「では、なにに対しての謝罪ですか？」

「それは……、私が食いしん坊なばかりに、和馬さんをしょっちゅう大変な目に遭わせてしまっているなあって」

すると和馬さんは優しく目を細めて、ポンポンと私の頭を軽く叩いた。

「なにを言うのですか。ユウカのためなら、私はなんでもします」

マカロンの箱を手にシユンと俯く私を、和馬さんは右腕で抱き寄せる。

「以前も話したように、込み合う店内での買い物は少々大変ではありましたが、ユウカ的笑顔を見るためでしたら、恥ずかしいと思うことなどありませんよ」

「そうは言っても……」

言いかけた私の唇を、和馬さんの左人差し指がピトツと塞ぐ。

「ユウカ的笑顔が見たいという、自分のワガママを押し通しているだけです。あなたはなにも気にすることなく、そのマカロンを受け取ってくださいさすればいいですよ」

穏やかな笑顔で、優しく告げる和馬さん。

「そして、できることなら謝るのではなく、とびきりの笑顔で『ありがとう』と言ってほしいです」

彼の人差し指がゆっくりと離れてゆく。

私は顔を上げ、和馬さんを見つめた。

「ありがとうございます。すっごく嬉しいです！」

私は心の底から感謝の気持ちを込めて、笑顔を向けた。

そんな私を見て、和馬さんも満足そうな微笑みを浮かべる。

「やはり、ユウカの笑顔は最高に素敵ですね」

私の笑顔一つで浮かれるだなんて。言葉は悪いが、和馬さんは随分とお手軽な人ではないだろうか。

私はかなり感情が表に出るタイプだから、嬉しかったり楽しかったりすれば、すぐに笑う。

そんな私の笑顔は貴重でもなんでもなくて、あまり価値はないように思うけれど。

そういつたことを和馬さんに話すと、彼は形のいい目をウルリと細めて首を横に振った。

「会社などで笑っている時の顔ももちろん素敵ですが、私だけに見せてくれる特別な笑顔というものがあのですよ」

「え？ 『特別な笑顔』ですか？」

意外なことを聞き驚いていると、彼の手が伸びてきた。そして大きな手の平が両頬をフワリと包

み、そつと彼の方へ顔を向けさせられる。

「私のことが大好きだという気持ちのこもった笑顔なんです。美味しいものや可愛い動物を前にした時の笑顔とは、いくぶん表情が違うのです」

まっすぐに私を見つめ、和馬さんが穏やかに告げた。

頬に伝わる温もりと彼の発言が恥ずかしくて、私はちよつとだけ目を伏せる。

気恥ずかしくて忙しく視線を彷徨わせていたら、和馬さんがクスリと笑った。

「もしかしたら、私の思い込みなのかもしれないがね。まあ、ユウカの笑顔が見られるだけで私は十分満足ですから、実際のところとは違っていてもかまいませんけれど」

苦笑する彼に、私は小さく首を横に振る。それから頬に触れている和馬さんの手に、自分の手をオズオズと重ねた。

「ユウカ？」

名前を呼ばれ、私はもう一度首を横に振る。

「お……、思い込みなんかじゃ、ない、ですよ」

たどたどしいながらも、私は言葉を紡ぎ続ける。

「だって……、和馬さんのことが大好きなのは、ほ、ほ、本当のことですし……」

顔を真っ赤にしてモゴモゴと話す。

恥ずかしがってばかりの私だけど、大事なことはきちんと言葉にしないとけないのだと、最近

になってやっと気が付いた。

私は和馬さんが向けてくれる「好き」や「愛してる」の十分の一も返せていないだろう。それでも、言わなくてはいけないと感じた時には、ううん、言いたいと感じた時には、ちゃんと伝えた方が、和馬さんだって嬉しいんじゃないかな。

はにかみながらも自分の気持ちを言葉にすると、和馬さんは親指の腹で私の頬の丸みを優しく撫でてくる。

「全開の笑顔を見せてもらえるだけではなく、こんなに嬉しい告白を聞かせていただけるとは」  
伏せていた視線をチラッと上げて様子を窺うと、和馬さんは幸せそうに微笑んでいた。

そんな彼を見て、私はちよっとだけ罪悪感を抱く。

これまで一緒に過ごしてきた時間の中で、彼にばかり好きだと言わせている自覚が嫌というほどあるのだ。

「あの……。これからはもつと言いますね」

そう告げると、和馬さんは「あなたはそのようなことを気にしないでください」と返してきた。

「でも……」

口ごもっている、和馬さんは手の平に少し力を入れて私の頬を包み込む。

「もちろん、言ってもらえることは大変嬉しいのですが、無理を言うなら、私の本意ではありません」

俯き気味だった私の顔を軽く上向きにさせ、和馬さんは視線を合わせてくる。

「恥ずかしがり屋のあなたの口から、滅多に聞くことのできない告白だからこそ、価値があるのです」

優しい表情の彼を見つめ返しながら、私は疑問を言葉にした。

「じゃあ、いつの日か、私が顔を合わせるたびに『和馬さん、大好き』って言うようになったら、価値がなくなってしまうですか？」

その言葉に、和馬さんは即座に首を横に振る。

「いいえ。たくさん言ってくださるようになって、それはそれで、私はやはり嬉しく思います」

「えー？ 結局、私はどうしたらいいんですか？」

困惑の表情を浮かべる私に、彼はニコリと笑った。

「ですから、どうもしなくていいですよ。あなたが言いたい時に言ってくださいれば、それで私は満足なので、私から」

なんだか和馬さんに申し訳ない気もするが、本人がそれでいいというのであれば、気にすることはやめた方がいいのだろう。

ぎこちない告白は、かえって和馬さんに気を遣わせてしまうかもしれない。

しばらく考えた後「分かりました」と言つてうなずくと、頬にあつた手がスルリと離れてゆく。

「私は、そのままのユウカを愛していますから。あなたが変わっても変わらなくても、ユウカを愛



しいと思う気持ちは同じです」

そう言いながら、和馬さんが抱き締めてくる。

優しい言葉と温もりに包まれ、私は耳まで真っ赤にしつつ、精一杯、彼を抱き締め返した。

……という、なんとも甘々で、とても他の人には聞かせられないようなやりとりを、マカロンを受け取った時に繰り広げたのだ。

しかも、ここまででも十分恥ずかしいのに、この話にはまだ続きがあつて……

和馬さんの甘い告白を聞いた後でも、目の前にあるマカロンを忘れた訳ではない。

私は改めてお礼を述べて、鮮やかなピンク色のマカロンに手を伸ばした。

「いただきます」

一口かじって、思わず顔が綻ぶ。じつくり噛み締めて、また顔が綻ぶ。

「はあ、美味しい〜」

あつという間に一つ食べ終え、即座に二つ目に手を伸ばす。

満面の笑みで食べ進める私を、横にいる和馬さんがなにやら熱心に見つめている。

その視線は、さっきの穏やかな表情とは違っていた。優しい微笑みはそのままんだけど、やたらと目が真剣なのだ。

そんなマジマジ見られると、少し居心地が悪い。

——見ないでって言ってもいいのかなあ。

美味しいものを食べている時の笑顔も好きだと言って、わざわざこのマカロンを買って来てくれた彼にそんなことを告げるのは申し訳ない気もする。

とはいえ、どうも落ち着かない。

どうしようかと彼を窺ったところ、和馬さんの表情に違和感を覚えた。

彼の視線の先にあるのは私の顔に違いないのだが、目が合わない。

——なんだろう。

二つ目を食べ切った私は、こっそり彼の様子を観察する。

そこで気が付いた。

和馬さんは、私が食べているマカロンを眺めているのだ。

日頃から、甘い物はほとんど口にしない和馬さん。そんな彼が、なぜマカロンを真剣に見ているのだろうか。

私が美味しい美味しいと騒ぐから、食べてみたくなったのだろうか。

——まだたくさんあるし、せっかくだから和馬さんにもお裾分けしよう。

三つ目を食べ終え、用意していたミルクたっぷりのカフェオレを飲んだ私は、箱から一つ摘み上げて彼の口元に差し出す。ちなみに和馬さんには、いつものようにブラックコーヒーを淹れた。

「食べてみます？ 甘すぎなくて美味しいですよ」

ところが、和馬さんはやんわりと辞退してきた。

「いえ、私はけっこうです。ユウカがすべて食べてください」

どうやら、マカロンが食べたかったわけではないようだ。

それならば、なぜじつと見ていたのだろうか。

彼に差し出したマカロンを自分の口に運びながら首を捻る。そんな私の耳に、彼のつぶやきが届く。

「マカロンの色が、あなたの肌に付けたキスマークの色に似ていると思いませんか」

「コフツ！」

いきなりそんなことを言われ、思わずむせた。

拳で胸元をドンドンと叩くものの、それでもつかえが取れないので、慌ててカフェオレで流し込む。

「ケホッ。な、なにを、言うんですか!? コホッ」

咳を繰り返す私の背中を片手で撫でながら、もう一方の手で箱からマカロンを積み上げる和馬さん。しげしげと眺め、大きくうなづく。

「この赤みは、まさしくキスマークですね」

「そ、そ、そうですか!? ち、違うんじゃないかなあ、あははっ。あ、そうだ！ 和馬さん、コーヒーのおかわりはいかがですか?」

なんとか話題を逸らそうとしたけれど、しかし……

「違うかどうか、確かめてみましょう」

和馬さんの目は、艶めかしく光っていたのだった。

肩を跳ね上げた私は、ズザザッとソファの座面を後ずさる。

「か、和馬さん、ケホッ。別に、確かめなくても、ケホッ、ケホッ」

彼は持っていたマカロンを箱に戻すと、その手を私の背中に回した。

「大丈夫ですか、ユウカ」

そう言って大きな手でゆっくりと背中を撫でてくれるけれど、もともと片手は私の背中を撫でていたので……いつの間にか私は和馬さんにしっかりと抱き締められていた。

いや、あの、抱き締められるのはいいんだよ。ただ、あの発言の後だと、どうしても意識してしま

まうというか。

ドキドキビクビクしながら咳き込んでいると、和馬さんはグッと顔を近づけてきた。

いっそう私の心臓が跳ね上がる。

——い、いや、ちよ、ちよと待って！

彼の胸を手の平で押し返ししながら、私はギョッと目を閉じた。

すると、目尻に彼の唇がフワリと押し当てられる。

「涙を流すほど咳き込むなんて、苦しかったでしょう？」

穏やかな声で告げた和馬さんは、自分の膝の上に私を抱き上げ、あやすようにスッポリと包み込んできた。

そして左右の頬に唇を当て、まるで涙を吸い取るように優しくキスをする。

その様子に、心の中でホッと息を吐いた。どうやら心配した事態は起きなさそうだ。

苦しんでいる私を労るように背中を撫で、涙が滲まなくなるまでずっと瞼へのキスを繰り返してくれる。

「あ、ありがとうございます。もう、大丈夫で……す？」

ところが、先程一瞬私の脳裏をかすめたのは、やっぱり杞憂ではなかった。

和馬さんの腕の中から彼の顔を見上げると、私の肩はふたたび跳ねた。

彼の瞳は、少しも艶めきを失っていないかったのだ。

「や、あの……」

若干顔を引き攣らせる私に、彼は静かに微笑みかける。

「私は一度気になってしまったことは、ハッキリさせないと落ち着かない性分ですので。それに……」

いったん言葉を区切った和馬さんは右手で私の頬に触れ、親指の腹で瞼をじっくりとなぞる。

その指の動きがなんとなく熱を孕んでいるのを感じ取り、私の心臓はますます早鐘を打つ。

「か……、和馬さん？」

私の呼びかけに、彼はただニツコリと笑みを深める。

——やっぱり思い過ぎなんじゃない。和馬さんは本気だ。

私は小さく息を呑んだ。

「かず、ま、さん……？」

もう一度名前を呼ぶと、頬にあった手と背中に回されていた腕にジワジワと力が込められてゆく。

「涙で濡れた瞳のユウカは、可愛らしい上に色つぼいですね。すっかり煽られてしまいましたよ」  
グイッと抱き寄せられる。

彼の瞳の奥で揺れる光は、肉食獣が捕食前に見せるものようだった。

顔の輪郭がぼやけるほど、二人の距離が近づく。

私の視線の先にある彼の目が、優しく、そして、艶っぽく細められている。

「ユウカ」

ささやくような小さな声で和馬さんが私を呼んだ。その声もセクシーで、トクンと私の心臓が跳ねる。

目を合わせていられなくなり、スツと顔を伏せると、おでこにキスをされた。  
「ユウカ」

もう一度私の名前を口にした彼は、おでこに当てていた唇を徐々にずらし、瞼や目尻にキスをし  
てくる。

「よかった。涙は止まったようですね」

その口調がめちゃくちゃ甘くて、私の心臓がまた跳ね上がった。

優しいと思ったら、急に強引になって。かと思えば、即座に甘さを漂わせて。

——なんか、もう、色々悔しいなあ。

あらゆることの経験値が低い私が和馬さんに翻弄されるのは仕方ないことなんだけど。

変な意地を張っていた私は、何度名前を呼ばれても視線を逸らし続けた。

目元にあった和馬さんの唇はさらに移動して、右頬へと滑り降りてくる。

チュツと音を立ててキスを繰り返しながら、彼の右手がゆっくりと私の首の裏を這う。

そして大きな手が私のうなじを包み込み、伏せ気味になっていた私の顔をゆっくりと上げさせた。

恥ずかしくていっぱいいっぱいになっている私は、最後の抵抗とばかりに目を合わせようとはし  
なかった。

すると、和馬さんが小さく笑う。

「ユウカ」

また私の名前を呼ぶ。蕩けそうなほど甘く、僅かに切なさも含んだ声だった。

そんな声を間近で聞かされ、トクトクと小刻みに跳ねていた心臓がキュウツと締め付けられる。

真っ赤な顔で瞬きを繰り返し、視線を彷徨わせ続けた。

そんな往生際の悪い私を責めたりせず、和馬さんはこめかみに優しく唇を押し当てながら、さら  
に引き寄せる。

「こうしていると、あなたを独り占めしていることを実感できますね」

しみじみとつぶやき、彼は私の鼻先にキスを落とした。二回、三回と唇を寄せ、四回目にはペロ  
リと舐められる。

「ふひゃっ」

和馬さんに舐められたことも恥ずかしいし、ちっとも色つぼくない声を出してしまったことも恥  
ずかしい。

二重の羞恥で、カアツと耳まで赤くなる。

私は居たたまれなくなつて、和馬さんの肩口に顔を埋めた。

ギョツとしがみつくと、彼は微かに笑みを零す。

「ふふ、可愛い」

私の首の裏にあった彼の手が少し上に移動し、髪を梳く。指先が時折地肌を這う感触が、なんと  
も気持ちいい。

私は縫るように和馬さんに身を寄せ、ボソボソとつぶやく。

「……和馬さんはかっこいいです」

この言葉に、彼がハッと息を呑んで手の動きを止めた。

チロリと彼を見遣ると、切れ長の目の縁が赤くなっている。どうやら照れているようだ。

「不意打ちはズルいですよ、ユウカ」

眉を寄せ、困ったように微笑む和馬さん。

珍しく反撃できて嬉しくなっていると、彼との距離がいつそう縮まってゆく。

アツと思つた時には、和馬さんの唇が私の唇に重なっていた。

彼の唇が私の上唇を挟んで微かに吸い付き、少し離れては、またやんわりと食む。

そんなキスをしばらく繰り返した後、下唇も同様に奪われる。

和馬さんは痛くない程度に吸ってから、僅かに甘噛みしてきた。

ヒクリと肩を震わせると、歯を立てた場所を舌先で撫でられる。

まるで壊れ物に触れるように、とにかく優しいキスが繰り返された。

上下の唇にそれぞれキスをしていた和馬さんは、やがて右に角度をずらして強めに唇を押し当て

る。また離れたかと思えば、次は左に首を傾けてしつとりと唇を重ねた。

しばらくキスを堪能した後、和馬さんはほんの僅かに顔をうしろに引く。とはいえ、今も唇の一

部は触れていた。

そんな状態で、和馬さんは私の名前をささやく。

「ユウカ……」

吐息まじりのその声がとにかくセクシーで、私の心臓は痛いくらいにキュウツとなる。

私は閉じていた瞼を徐々に開き、オズオズと視線を合わせた。

戸惑いや羞恥、それと、大好きな人に愛情を注がれる喜び。色々な感情がまじりあう。

そんな私を間近で見ながら、和馬さんはスツと目を細める。

「先程の不意打ちは少々悔しかったです、すごく嬉しかったです」

とても優しい笑顔を向けられた。

いつもドキツとさせられてばかりだから、意趣返しのもりで言ったのに、こんなに優しく笑っ

てくれて申し訳なくなってくる。

——これなら、変にひねくれた感じで言わなければよかったな。

和馬さんがかっこいいと思っっているのは本心なのだから。

心の中でつぶやいた私は、視線を上げて和馬さんを見つめる。彼の優しい表情を視界に収めなが

ら、恥ずかしくても目を逸らさずに口を開く。

「和馬さんは本当にかっこいいです。自慢の……、こ、恋人、です」

すると、和馬さんの笑顔がいつそう晴れやかなものになった。

「ああ、ユウカ。そんなに私を喜ばせて、どうするつもりですか。あなたへの愛情が溢れて止まり

ませんよ。愛しさがますます募<sup>もつ</sup>って、苦しいほどです」

その表情は、私を丸ごと包み込むように温かくて穏やかだ。安堵<sup>あんぶ</sup>した私は、ふたたびゆっくりと目を閉じた。

それが合図であるかのように、和馬さんは唇の重なりを深め、舌をスルリと私の口内に忍び込ませてきた。

いまだ深いキスに慣れていない私を怖<sup>おそ</sup>がらせないようにか、奥の方で縮こまっている私の舌を窺<sup>うかが</sup>いながら、和馬さんは静かに自分の舌を絡<sup>から</sup>ませる。

そうして緊張<sup>きんじやう</sup>で強張<sup>きんぢやう</sup>っている私の体を、大きな手で優しく撫<sup>な</sup>でた。

少しだけ唇を離れた彼が、そっとささやく。

「恥<sup>は</sup>ずかしがってもかまいませんが、怖<sup>おそ</sup>がらないで。あなたが怖いと思うようなことは、絶対にしませんから」

彼の手から伝わる温もりに身を任せているうちに無駄<sup>むだ</sup>な力が少しずつ抜けて、それと同時に和馬さんの舌も深くまで潜<sup>ひそ</sup>り込んできた。

クチュリという湿った音が耳に届く。

全身が羞恥<sup>しゆうぢ</sup>のあまり熱くなったけれど、これまでのキスですっかり腰砕けになっている私は抵抗できない。

「ふ、あ……」

クチュクチュという水音に、私の小さな喘<sup>あえ</sup>ぎ声がまじる。

和馬さんの舌の動きはどんどん大きくなっていき、水音と喘<sup>あえ</sup>ぎも大きくなる。

「ん、んっ」

キスしたまま覆<sup>おほ</sup>いかぶさってきたため、私は反動で仰<sup>の</sup>け反<sup>そ</sup>った。

私が上向きになったことで彼の舌が潜<sup>ひそ</sup>り込みやすくなり、舌の付け根や頬の奥まで舌先でなぶられる。

どれほどの時間、濃厚なキスを繰り返したのだろう。ボンヤリした頭では分からない。

軽い酸欠と和馬さんから漂<sup>ただよ</sup>う色香のせいでクラクラする。

クツタリと体の力が抜けきったところで、ようやく彼の舌が私の口内から抜け出した。

「甘酸っぱいですね」

マカロンのクリームのことを言っているのだろう。味が分かるほど深いキスをされたという証<sup>あかし</sup>を示されてたまらなく恥<sup>は</sup>ずかしい。

だけど反撃する余力は、今の私にはこれっぽっちも残っていないかった。手も動かないし、言葉を発<sup>は</sup>つすることすらできない。

彼のなすがままなのが悔<sup>く</sup>しくて睨<sup>にら</sup>み上げると、和馬さんは楽しそうに口の端を上げた。

「さて、確かめさせていただきましょうか」

そう言っ、私を横抱きにして立ちあがる。

「……え？」

気の抜けた声を零した私にかまわず彼は歩を進め、迷うことなく寝室へと入っていった。広いベッドの中央に寝転がされ、背中が僅かに沈む。

ボンヤリしていた頭でも、これからの展開は即座に予想できた。

「か、和馬さん？」

私の肩を押さえつけて馬乗りになっている彼に呼びかけると、また口角を上げる。

「私を煽った責任、取ってくださいね」

——煽ってない！ 少しも煽ってない！

しかし、心の叫びは彼に届くことはなく……

いや、届いていても、いつもまるっと無視されるのだけれど、今日もやっぱり彼を止めることはできなかった。

力の入らない体でジタバタしてみるのが、和馬さんは私の肩を余裕たっぷり押さえつけたままだ。そうして首を傾けて、クスリと笑う。

「どうして抵抗するのです？ リビングの方がよかったですか？ 明かりの下ですから、なにもかも見えてしまうでしょうね。私はそれでもかまいませんし、むしろその方が嬉しいのですが」

それを聞いて、ブルブルと首を横に振った。

——無理、無理、無理！ そんなの無理!!

慌てふためく私を見て、和馬さんがまた笑う。

「ユウカのために、わざわざ寝室に移動したのですよ。ほら、私は優しいでしょう？」

そう言って笑う彼は、肉食獣そのものだった。

痛くはないけれど、逃げ出すことはできない絶妙な力加減で私の肩を押さええている和馬さん。馬乗りになっている状態から少しずつ前屈みになり、顔を近付けてくる。

「ユウカを前にすると、どうしてこうも抑えがきかないのでしょうかねえ。十代の頃でも、これほど強い性衝動はなかったのですよ」

クスリと極僅かに笑みを零した和馬さんは、独り言のように小さな声で続けた。

「ユウカだけが、これまでの私を覆して、壊して。そして、新しい私……いえ、本来の私を取り戻させてくれたのです。驚くと同時に喜びに包まれているこの心境を、どうやったらあなたに伝えられるのでしょうか」

寝室の明かりは消えているものの、ヘッドボードに小さな明かりが灯っていた。だから、彼がどんな表情をしているのかよく見える。

意思の強さが表れているスツとした眉と、目尻がほんのちよつとだけ上がっている形のいい目。

それがすぐく綺麗だったから、自分の置かれている状況を忘れて、彼に見入ってしまった。だって、和馬さんは本当にかっこいいんだもん。

薄く開いていた彼の唇が、私の名前をささやく。

「ユウカ」

その声は、今日聞いた中でも一番の甘さと色香を放っていた。それを聞いただけで、またまた私の心臓がキュウツと切なく締め付けられる。

逃げ出す気力を、根こそぎ奪われてしまった。

私は小さく息を吸い込み、それから静かに目を閉じた。

私の体に負担がかからない体勢で、和馬さんが覆いかぶさってくる。

そして唇を塞がれたと思ったら——いきなり舌が入ってきた。思わず、体がビクツツとしてしまう。

「ユウカ、大丈夫です。なにがあっても、私はあなたを傷付けたりしませんから」

震えるたびに、和馬さんはキスを解いて優しく声をかけてくれた。

蕩けそうな甘い声で、「可愛い、ユウカ」、「大好きですよ」、「愛してます」と何度も何度もささ

やく和馬さん。

これまでも深いキスはしてきたし、ついさっきだつてしたばかり。それなのに、私は毎回毎回、体を震わせてしまうのだ。

いつになったら、私はスマートにキスができるようになるのだろうか。このまま一生、変わらないかっつたりして……

自分のお子様具合に落ち込んでみると、和馬さんの舌が私の舌に絡みついていた。クチュリとい

う水音を伴って動き回る舌に、またしても体がビクツツとなった。

嫌なわけではない。

怖いわけでもない。

ただ、慣れないだけ。

口を塞がれているので、そのことを伝えることができない。だから私は彼の胸元にしがみついて態度で示す。

彼のワイシャツが皺になるくらい、きつく握り込む。

繰り返されるキスにビクビクと小刻みに体を震わせながらも、その手は絶対にワイシャツから離さなかった。

そんな私の頭を片手で優しく撫で、もう片方の手で私の手に触れてきた。そうしていったん、強く舌を絡みつかせてから、和馬さんの舌が静かに後退してゆく。

唇が離れ、私は浅く息を吐いた。それから彼の肩口に擦り寄り、改めてワイシャツを握り締める。すると、和馬さんはフツと笑った。

「あなたの可愛らしさは、どうしてこうも私の心臓を貫くのでしょうか。ユウカの仕草を見ているだけで、心臓が止まってしまいそうですよ」

耳元に口を寄せ、和馬さんが苦笑まじりにささやく。

時折、耳に触れる彼の唇の感触と吐息に、うなじの辺りがチリチリと痺れた。



「あ……」

思わず声が漏れる。

すると、また和馬さんが苦笑した。

「ユウカ、あなたはあなたそのままです。恥ずかしがり屋でも不慣れでも、なんの問題もないのです。繰り返し言っていますが、私はそれを心から望んでいるのですよ」

私の心情に気付いてくれた彼の言葉が、胸の奥を温かくしてくれる。私はいつそう和馬さんしのみつく。

「分かっているんですけど、やっぱり、毎回変わらない自分がなんだか、ちょっと……」

その後に『情けない』と続けようとしたところで、彼が私の耳にパクリとかじりついた。

「ふ、あっ！」

さっきまでは小さな痺れに襲われていたうなじに、今度はゾクリという大きな疼きが襲ってくる。首を振って逃れようとするものの、髪を撫でていた彼の右手が私の頭を拘束して離れられない。

そのため、和馬さんの甘噛みを受け続ける羽目になってしまった。

「は、んっ。や、やめて……」

ギョツと目を閉じて刺激に耐えるけれど、和馬さんが耳の輪郭に沿って舌先を這わせ始めたため、なおのことゾクゾクする。体の震えが止まらない。

「か、ずま、さ……ん」

わななく唇で彼を呼ぶが、和馬さんの舌は耳のうしろから首筋へと下りてきて止まらない。弱い部分をねつとりと舐められ、零れる吐息は色付いてゆく。

「ん、んっ……、や、ああ……」

軽く仰け反った首元にも舌が這い、鎖骨を甘噛みされると、彼のワイシャツにしがみついていることすらできなくなっていた。

力の抜けた手が、パサリと乾いた音を立ててシートに落ちる。

それでも和馬さんの唇と舌の動きは止まることなく、なおも下を目指す。

「いい声ですよ、もつと聞かせてください」

いつの間にかブラウスのボタンが外され、前身ごろが大きく左右に開かれ、キャミソールが露わになっている。

彼は鎖骨より少し下の辺りに唇を寄せ、そこにきつく吸い付いた。

「んっ」

チリツとした痛みを感じ、私の体が大きく跳ねる。

私の胸元に顔を寄せた状態のまま、和馬さんは動かない。

どうしたのだろうかと思っていたら、ややあつてから満足そうな声が聞こえた。

「綺麗な薄紅色になりましたね」

そう言っ、キスマークがある辺りをペロリと舐める。それから顔を上げ、その場所をじっくり

と指でなぞった。

「本当にいい色ですね。薄暗い中でも、よく見えます。やはり、あのマカロンの色とキスマークの色は同じですね」

そうだった。これを証明するのが目的で、寝室に連れ込まれたのだった。

ということは、目的を達成したのだからもうこれで終わりだろうと、ホッと胸を撫で下ろした。ところが。

和馬さんがまた顔を近付けてきたのだ。しかもキャミソールの胸元を指で引き下げ、さっきよりもきわどい場所に。

唇を強く押し当てた彼は、一度ならず、二度、三度と同じように肌を吸い上げる。

回数を重ねるたびに唇の位置は下にずれ、今ではブラの際にまで及んでいた。

「あ、あ、あ、あのっ、か、か、か、和馬さん？」

慌てて呼びかけると、上目遣いの和馬さんとバッチリ視線が合う。その目は少しも艶を失ってはいなかった。むしろ、倍増している。

「え、ええと、マカロンと同じ色だって分かったんですよね？」

「はい」

私の言葉に、ニッコリと笑う彼。だけど、目が笑っていない。

「じゃ、じゃあ、もう、終わり……ですよね？」

オズオズと問いかければ、

「いいえ」

と、即座に否定の言葉が返ってきた。

「な、なんで!？」

上半身を起こした私は、ヘッドボードの方へとずり上がり、逃れようと試みる。その私をすぐさま追いかけて、和馬さんが再び押し倒す。

僅かに息を呑むと、和馬さんの笑みが深まった。

「ユウカは先程、マカロンを味わいましたよね？」

「は、はい。とても美味しかったです」

首をガクガクと縦に振って同意を示すと、和馬さんがますます笑みを深めてくる。

「ですから、今度は薄紅色に染まったユウカを、私が味わってもいいですよね？」

「はい!？」

目を見開く私に、和馬さんはクツクツと笑った。

「いいですよね？」

——その言い分、まったく意味が分からないんですけど!？」

「い、いや、それはっ」

戸惑う私にかまわず、和馬さんは私からキャミソールを素早く脱がせた。同じように、スカート